

泥炭採掘跡地等の再生



歴史

▶「泥炭採掘跡地」の歴史

サロベツでは、泥炭の工業的な利用価値が注目され1970年(S45)から2002年(H14)まで円山南部で泥炭採掘が行われました。採掘は、高層湿原域を中心とした150ha(当時の高層湿原面積の約16%に相当)あまりの範囲に及びました。



航空写真で見ると、現在でも丸山南部には泥炭採掘跡が開放水面等として残っていることがわかります。



＊浚渫船による採掘作業の様子

問題

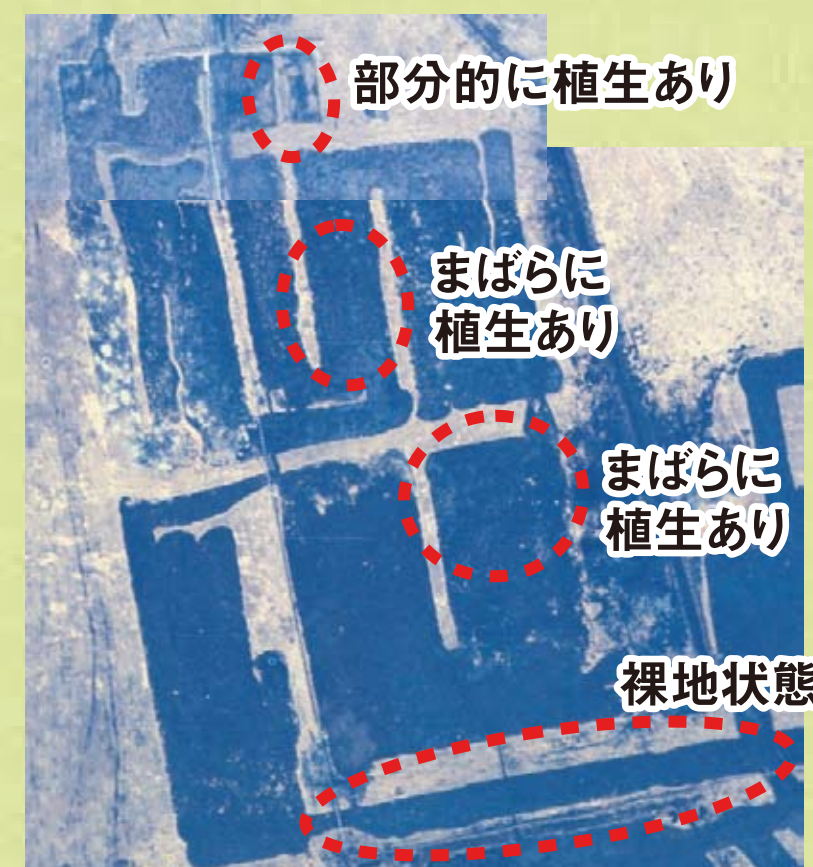
▶「泥炭採掘跡地」には植物が定着していない場所があります。

泥炭採掘跡地では、依然として植生が定着しない場所(裸地)が見られます。

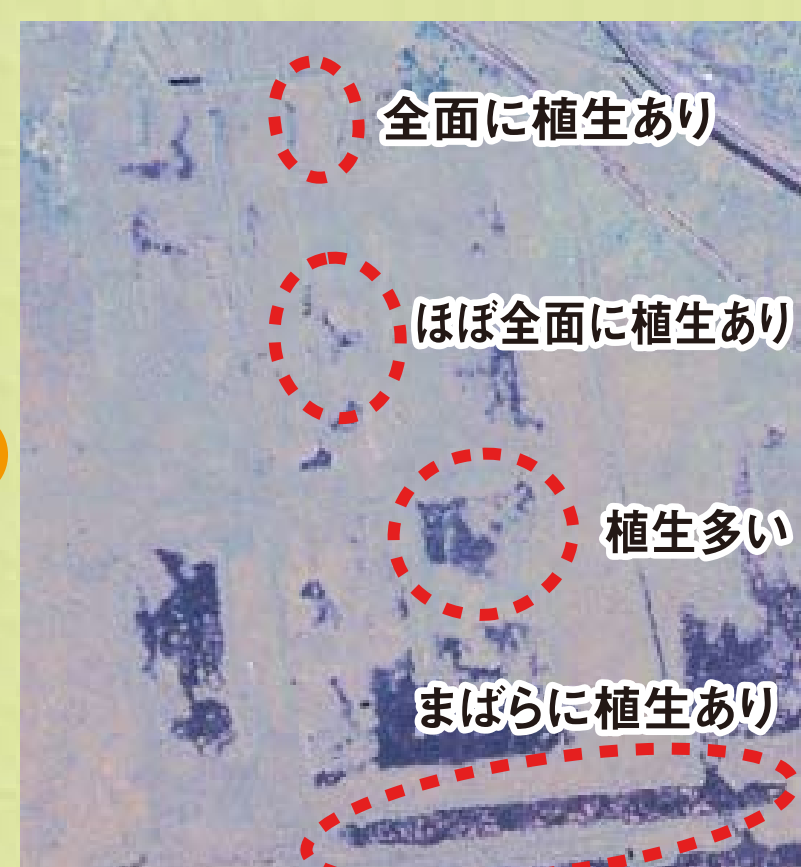
■植生の変遷



1977年(閉塞後2～7年)



2000年(閉塞後25～30年)



目標

▶植物の定着が見られない裸地の再生を促します。

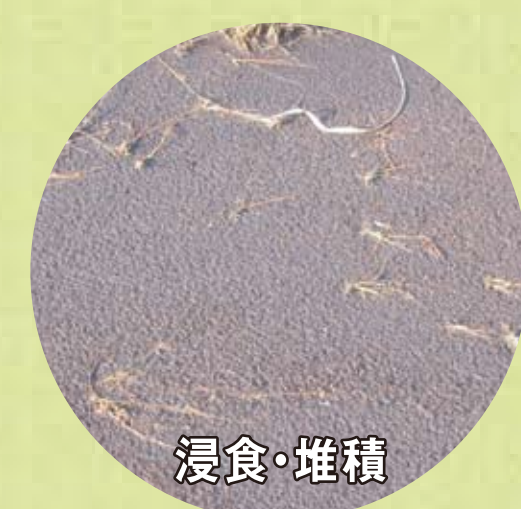
植物の定着が見られない裸地において、降雨による浸食や乾燥などを緩和することにより、植物の定着を促します。

裸地部表層の環境条件



乾燥による
表層の剥離

↓
植物の発芽は困難であり、
発芽しても生育し続けるのは難しい。



降雨後の表層の
攪乱

↓
裸地の表層は流水によって強い攪乱を受け、植物が倒れ、定着が難しい。

取り組み

▶「泥炭採掘跡地」では次の取り組みを行っています。

乾燥化の防止や表土の保全

マルチングによる表土の保護や溝の造成を行い、乾燥化の防止や表土の保全を行っています。

①ネットの設置-マルチングによる表土の保護



生育している植物の生育を妨げずに新たに種子が定着するよう促しています。

【目合い3パターン】



②溝の造成-乾燥化の防止

溝を作ることによって水が溜まる箇所をつくり、乾燥を抑えます。



多様な水分条件を創出することによって、植物の定着を促します。

【深さ2パターン】

